

恋人や友人、同僚から、その日入ったお店の店員さん、街ですれちがった人まで……ふだん、私たちはたくさんの人とのつながりの中で生きています。忙しい毎日の中で、誰かがふと見せた笑顔や優しい一言に、思わず心と体がふわっとあたたかくなる瞬間。この新連載では老若男女、さまざまな人たちが体験した、ハートフルなストーリーをお届けします。

人は時に、思いもしないことを考えつく。雑貨屋をやりたいかった二人の女性が夢をかなえるために思いついたのは「移動雑貨屋」だった。

「私たちは明日からでも雑貨屋です、って名乗りました。それで、思いついたのが移動雑貨屋でした。25万円で中古の軽トラックをすぐに買いました。国産でマニュアル車、エアコンも付いてなくてボロボロだったけど、丸目のライトがかわいくて気に入りました。

軽トラの改造は、友人や知り合い、たくさんの人たちが協力をしてくれて。突飛な発想をみんなが面白がって手を貸してくれたんです。車の塗り直しも業者さんに20万円のところを7万円でお願いします！ っていうと頼み続けられたら、じゃあ見える所だけだよって最後は引き受けてくれて。でも取りに行ったら、頼んでもいないのにホイールとかバンパーまできれいに塗装してくれてたんです。社長が面白がってやってくれたんですって。トレードマークになった赤い幌も普通のじゃなくてテント地の特注品だし。荷台の棚は、友人たちが作るのを一緒に手伝ってくれました」

その名も「トラックマーケット」誕生。移動雑貨屋を始めたひとり、キムラミユキさんは、そう楽しそうに当時は振り返ってくれた。

「私たち、好きなところへ行って、この辺でお店開こうかって営業できると思っただけで始めたんです。でも、誰に許可取ったんだってコワイ人が近寄ってきたり、お巡りさんに注意されたり。結局最初は、石神井公園近くのレストランや下北沢のカフェの駐車場に停めさせてもらって営業を始めました。しばらくしてからは地方のイベントなんかにも出かけるようになって、いろんな町に出かけて行くのは、とにかく楽しかったです。

Heartful Story - 02
「移動雑貨屋。」



ある時なんて「主人が出かけた後はマンションの駐車場が空くから、そこに店を出してあげませんか」って声をかけられて。もう喜んで！ ってお受けしました。行ってみたら窓から顔を出してる人たちが見えるんですよ。いつもならお客さん来るかなーなんて思いながら行くのに、着いたらマンションから奥さんたちがドドドって降りてきて、数時間で空っぽになるぐらい売れちゃって。すごく楽しかった。買うほうも、売るほうもワクワクしたんですよ」

赤い幌の移動雑貨屋は、いつしか話題になり、テレビや雑誌でも取り上げられるようになった。「でもホントは、楽しいことばかりじゃなかったんですよ。トイレも大変だし。日焼けで真っ黒々になっちゃうし。冬はホカロンをいっぱい貼って。それで一日出勤しても誰も買ってくれない時もあったり。帰り道でもうやめてやる！ と思ったこともありましたよ」と、彼女は笑う。しばらくしてパートナーだった友達が都合で続けられなくなって、キムラさんひとりで移動雑貨屋を続けることになったりもしたけれど、それでも彼女は走り続けた。

いま、赤い幌の軽トラックはもう走っていない。数年前、幌が限界になってしまい廃車にしたという。けれど、キムラさんは夢をかなえていた。いま彼女は、湘南の辻堂で雑貨ショップを営んでいる。赤い幌のイメージそのままの、赤いひさしの、小さなしゃれた雑貨店。お店の名前は、もちろん「トラックマーケット」。

また移動雑貨屋をやってみたくはないですか。そう彼女に尋ねたら「やりたい。軽トラックが欲しい！」。即答だった。隣りで、やさしそうなお店主が苦笑いしていた。キムラさんの移動雑貨屋は、いまま走り続けていた。車輪の無いお店にはなっただけれど。